

富山地域の縄文遺跡(2)

百塚遺跡

ひゃくづか

百塚遺跡の発掘調査概要

百塚遺跡は富山市百塚地内、呉羽丘陵北東端の長岡台地（標高約 20m）に位置する縄文時代の遺跡です（図 1）。近辺には史跡北代遺跡をはじめ、同時代の遺跡が多く営まれました。

県道（草島西線）新設に先立って平成 19～22 年に 5,770 m²の発掘調査を行ったところ、百塚という地名が示唆する通り、弥生～古墳時代の墓を 25 基検出しました。弥生時代の墓（墳丘）の下層に縄文時代の遺物（土器・土製品・石器）を含む黒色土層があり、その下面（黄褐色土）で縄文時代晩期（約 2,700 年前）の遺構（土坑）を 5 基検出しました。土坑は遺存状態が悪く、用途は不明です。

発掘調査区内では、竪穴住居は検出されませんでした。早期末～前期（約 6,000 年前）、中期中葉（約 4,500 年前）、後期初頭（約 4,000 年前）と断続的ですが、各時期の縄文土器や土製品、石器が出土しています。後期後半（約 3,500 年前）～晩期末（約 2,300 年前）にかけては、土器や石器などの遺物が継続的に出土していることから、発掘調査区近辺に縄文人が居住していた可能性は高いと考えられます。



図 1 百塚近辺の主な遺跡

縄文時代早期末～前期の土器

弥生時代後期後半（約 1,900 年前）の方形周溝墓の盛土の下にある黒色土層などから、縄文時代早期末～前期の土器（胎土に繊維を含むものが多く、縄文や爪形文を施しています）が、縄文時代晩期など他の時期の土器等と一緒に出土しました。

わずかですが、蛸ヶ森式土器の破片も出土しています。蛸ヶ森式土器は北陸の縄文時代前期中葉（約 5,500 年前）の土器の指標となっています。蛸ヶ森貝塚は、百塚遺跡の西方約 2.4km に位置（白髭神社境内）する淡水産の貝塚で、北陸を代表する貝塚の一つです。温暖化により海水面が上昇した際、広がった旧放生津潟べりに形成された遺跡と考えられます。

縄文時代中期中葉の土製品

弥生時代後期後半の方形周溝墓の周溝内堆積土から、縄文時代中期中葉の動物形土製品（突起部分）が、縄文時代晩期など他の時期の土器等と共に出土しました。鼻の形を模し、鼻孔が表現されています（写真 1）。

写真 1
動物形土製品

縄文時代後期後半～晩期末の土器・土製品・石器

後期後半以降は、縄文土器の特徴から他の地域とのかかわりをうかがえます。後期では、石川県金沢市八日市新保遺跡出土土器を指標とする縄文時代後期末の八日市新保Ⅱ式土器（台付波状口縁深鉢）が出土しました（写真 2）。晩期では、岩手県大船渡市大洞貝塚出土土器を指標とする晩期初頭の大洞 B2 式土器（注口土器）が出土し、模倣または搬入品と考えら



写真 2 八日市新保Ⅱ式土器

れます。他にも、石川県野々市市御経塚遺跡出土土器を指標とする晩期前半の御経塚Ⅱ式土器（波状口縁深鉢）があります。この類例は富山市岩瀬天神遺跡など富山県東部地域に多く認められます。

地元の土器だけでなく、遠隔地の土器も出土しており、縄文人の交流が活発だったことをうかがわせます。

百塚遺跡の変遷と生業

変遷 地層の分析の結果、呉羽丘陵北端では7,000年前以前に植物（タケなど）が生育して土壌（黒色土）が形成されたことがわかりました。このような環境で、百塚では縄文時代早期末～前期、中期中葉、後期初頭に縄文人の活動の場となりました。近辺では、中前期末～中葉に北代加茂下Ⅲ遺跡、中期中葉～後期に史跡北代遺跡、後期後葉～晩期前葉に長岡八町遺跡が中核的集落として営まれました。百塚遺跡は長岡八町遺跡の東方約1.4kmに位置し、神通川寄りの集落として後期後半～晩期に栄えた可能性があります。

生業 百塚遺跡で縄文土器などの出土量が増える縄文時代後期後半から晩期末に、縄文人の活動が活発化したことは確かです。百塚遺跡の発掘調査では64点の石器が出土しました。打製石斧17点、磨製石斧14点、石錘8点のほか、製作途中の石斧（打製石斧1点、磨製石斧2点）もあります。これらだけで出土石器の6割以上を占めることから、植物性食料の採取や木器製作等のための木材採取・加工、川魚漁が百塚遺跡を残した縄文人の主たる生業だったと考えられます。

旧神通川（古古川）と遺跡立地

縄文人の活動が活発だった呉羽丘陵北東端ですが、弥生時代の初め頃から弥生時代後期後半まで人びとの活動痕跡が不明瞭になります。この理由は明らかになっていませんが、旧神通川の流路（図1の古古川など）やその水量などとも関係していた可能性があります。

古古川と百塚遺跡 百塚遺跡の北側で検出された弥生時代後期後半～古墳時代前期の墓は、黄褐色砂質土の上に築かれていました。土壌の分析から、黄褐色砂質土は旧河川の増水に伴って運ばれたものと考えられます。百塚遺跡の北側では黄褐色砂質土に縄文時代後期末の土器（写真2など）や晩期中葉の土器が含まれていました。黄褐色砂質土の下の黒色土には晩期後半や後期の土器が含まれていました。これらのことから、百塚遺跡の北側では縄文時代晩期後半以降、断続的に旧河川から水が流れ込むことがあり、水が引いた後の人びとの活動などによって縄文土器が黄褐色砂質土に混入したと考えられます。

古古川と遺跡立地 百塚遺跡など古古川沿いでは縄文時代晩期後半から弥生時代後期前半にかけて断続的に古古川から水の影響を受けやすい状況にあり、人びとの活動の場としては不適だったと考えられます。これが、呉羽丘陵北東端でこの段階の活動痕跡が不明瞭な一因と考えられます。

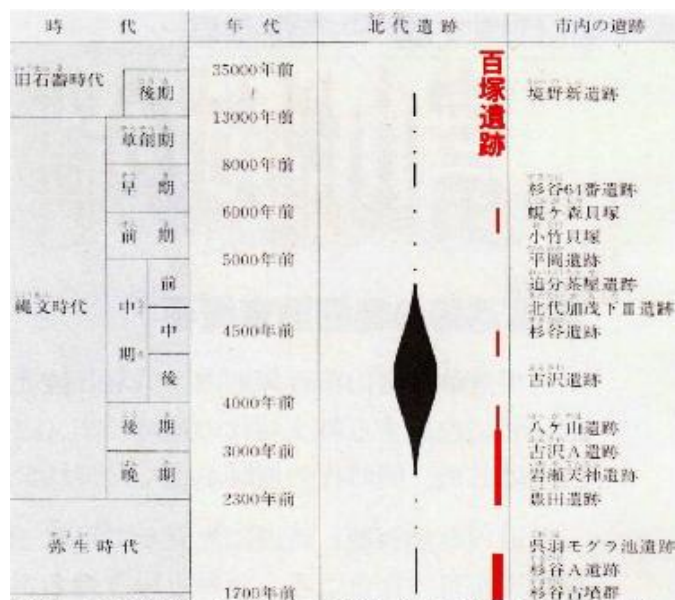


図2 百塚遺跡と北代遺跡の推移（旧石器時代～弥生時代）



図3 百塚遺跡北側の地層模式図